

暇潰しの “超”短編集

草花小路

プロローグ？

久しぶりに図書館へ来てみた。

は、いいものの…。

「何を借りれば…」

そりゃそうだ。普段マンガ位しか読まない奴が長編小説を読もうとしたって、どれを読めばいいか分かるはずないだろう。

だが、国語の山崎先生によれば、

「国語の成績が上がらないのは、本を読まないからじゃない？」

ということなので、成績のために、なにがなんでも読まなければいけない。…けど。

「もう、無理…」

適当に選んでみた物を読もうと試みた、が、プロローグで挫折した。

永遠に連なる文字が私を襲ってきたのだ。…いや、まあ、飽きただけなんだけど。

「ん？」

ふと目に入った「短」という字に、私は心が惹かれた。

「短編集…」

その本のタイトルは 「中学生に贈る短編集」 だった。

なんだか、ますます気になってきた。

長編が無理なら、短編を読めばいいじゃないか！しかも、これは「中学生」向きのはず！

ということで、やっと借りる本が決まった。

長編は、短編に慣れてからにしよう……。

「返却日は、一一です。」

久しぶりすぎて妙に緊張してしまっただが、無事に借りることができた。

にしても、小説を授業以外で読むなんて、久しぶりなのだろうか。…あれ？私って、小説を真面目に読んだことってあるのか……？

謎の不安に襲われそうになったところで、私は自分の今の心情について気づいた。

「ワクワク、してる？」

そう、ワクワクしているのだ。この私が。

お祭りや誕生日、クリスマスにまでも『ワクワク』なんてしない、私が。

そして何故か、笑っていた。

「変なのー。」

この本には、魔法の力でもあるのだろうか？

そんな、子供のようなことを思いながら、私は帰り道を早歩きで行く。



幸せ探し

夏休みも終わりに近づき、今日もオレは布団の上でダラダラと過していた。

「はぁ・・・、それにしても、あついなー」

何の変哲も無い日常。ただ、刻々と過ぎていく時間。変わらない自分。
オレは、全部がキライだった。
きっと、今世界で苦しんでいる人はたくさんいる。
そんな人たちから見ると、俺の世界は平和だ。 そう、平和・・・。

「平・・・和？」

確かに、平和だ。しかし、『平和』だからといって、必ずしも『幸せ』なわけではない。
こんな平和なら、オレはこんなもの いらない!
これは、オレのただのわがままに過ぎないと、自分でも分かってる。
だけど、こんな平和な日々を続けて、オレはいつ本当の幸せを見つけられるのだろうか？
そんなことを布団で考えていたら、いつの間にかオレは深い眠りに落ちた・・・はずだった。

「あーもう！暑くてねむれねーじゃん！！」

オレは猛烈な暑さから逃げ出すように、布団から出て 窓を開けた。
「はー、風っていいな。すずしー！最初っから開けときゃよかった。」

ふと、視線を上にとると、とてもキレイな夜空が見えた。

「・・・きれーだな。」

そのときオレは、『平和』の中の小さな 小さな『幸せ』を見つけられた気がした。

彼女と放課後、

彼女は、今日も笑っていた。

「あはは！あの番組おもしろいよねー！」

彼女、とは坂倉由美、学校1の人気者だ。

なんで、あんなにいつも笑ってられるんだろう？

私は、彼女の笑顔を見るたびに思っていた。

正直言って、私はあまり友達がない。だが、それはどうでもいい。何人かはあるのだから。友達なんて、そんなに多くても厄介事が多くなるだけだと思う。

確かに、友達と喋るのは楽しい。

でも、集中しているときに邪魔してきたり、あまりにも大きな声を出されても、ただの迷惑だ。

彼女は頭も良く、スポーツもでき、容姿も可愛く、みんなの憧れだ。

でも、中には彼女のことを『ウザイ』という人がいる。

この高校に入学してから半年が過ぎたが、一学期に比べてそういう人が増えている気がする。

私は、こうやって彼女が頑張るほどに人は離れて行き、最後には、独りになってしまう気がしてならないのだ。

「ねえ、宮城さん。今日、ゲーセン行かない？」

「えっ!？」

彼女は、突然、私に話しかけてきた。

「な、何で？」

私は驚きながらも、心から思っていることを言った。

「いやー、今日暇だからさ、杏奈とか優とかと行こうと思ってたんだけど、無理だったから。宮城さんともたまにはいいかなーって。」

「あ。うん……」

「で、行ける？えーと、五時くらいに。」

私は少し考えた。

しかし、彼女と話したい という思いに押され、行くことにした。

「うん。いいよ。」

「よかったー！じゃ、また後でー。」

色々話したいことはあるが、本当に自分が言えるか分からない。けれど、まずはやってみることにした。

なんだか自分らしくないなー、と思いながらも、私は微笑んだ。

本当は、私はただ、

彼女と普通に話してみたかったのではないかと、少し思った。

なんだか、今日の放課後は楽しくなりそうだー

フラワーガール

私に水をください。

君の笑顔という水を。

君の笑顔が無いと、私という小さく、弱い花は、

枯れて、消えて、無くなってしまうのですー

~~~~~

「おはよ！」 「・・・」

「もー！ちょっと、聞ってる？」

「・・・え？あ、ごめん。何？」

「だーかーらー、お は よ う って言ってんの！」

「あー、おはよ。」

「はー・・・、あんたほんつとに、うざいんだけど！」

「・・・ごめん。」

なんで謝るの？

前はあんなに言い返してきたのに・・・

「・・・もう、いいわよ！あんたになんか、二度と挨拶なんてしないんだから！」

「・・・ごめん。」

あいつは、最近こんな調子だ。いつも、ぼーっと、空を見ている。

前は、こんなこと無かった。原因は分かっている。

あいつの家族が殺されたのだ。一人残らず・・・それも、あいつが家出をしているときに。

きつと、カッとなった勢いで出て行ってしまったのだろう。

それが、家族との別れの瞬間になるとも知らずに。

「キーンコーンカーンコーン」 ……ああ、もう授業か。

~~~~~

「えー、宮川。」 「え、あ、はい。」

二時間目の道徳の授業中。

あいつにつられて、自分もぼーっとしていたら、いきなり指名された。

「宮川は、自分のことが好きか？」

「・・・あまり好きじゃ・・・」

「そうか、じゃあ、それは何でだ？」

「自分のやりたいことをすぐにできないし、悪口とか言うし……」

もう、先生！なんでそんなこと、私に聞くの！

これじゃ、いっつも自分を卑下する奴だって思われるじゃない！

先生を睨んでいたら、なんだか虚しくなってきた、人目を気にせずに眠ることにした。

でも、なぜだか頭が冴えてしまう。寝たふりをしながら考え事をしよう。

どうせ、ただの道德だ。こんなもの、本当は意味なんて無い。

みんな『きれいごと』を言うだけで、ちょっと真面目に考えても、ほんの少しの時間でその考えを忘れてしまうのだ。

私は本当に、あいつのことを真面目に考えているのだろうか？

心のどこかでは、あいつのことを『かわいそう』だなんて思って、私もきれいごとを考えて自分ことを良い奴だと思いたいだけではないのか？

ああ、もう、考えるだけで死んでしまいそうだ。

こんなとき、あいつと話したくなるのは、きっと私があいつのことを一

…もう寝よう。

そして、結局、私は寝てしまった。

どうして人間は、こんなにも醜い生き物なのだろうー

才能トレード

「陸はいいよなー、頭良くて。」

そんなことない。

「そんなこと無いって！まじで！」

本当に。

「じゃあ、この点数はなんだっつーの！」

それは、

「まあ、努力の成果ってやつです。」

「いやいや、才能ですよ。」

ちがう。

違うんだ。

俺に才能なんて無いよ。

何で、誰もわからないんだ？

お前らは本気でやってないだけだろ？

~~~~~

小学校のとき。

「今回のテスト、100点が陸君だけだったのよー。すごいわねー！」

「皆聞いてー、えー、青田君の絵が、入賞しました！おめでとう！」

「陸。また、標語で優秀賞取ったんだって？ははっ、お前は本当に自慢の息子だ！」

良い点とって、いろんな賞を貰って、たくさん褒められた。

中学校に入って。

「お前、陸上の大会出るらしいな。がんばれよ！お前なら、優勝とかできるんじゃない？」

「青田、お前の作文、賞取ってたぞ。さすがだな。」

「まあ！陸の作品が特別賞だったの！すごいわね〜。陸は、何でもできるものね〜。」

小学校のときとは、変わっていた。

俺が、褒められる事をするのが、当然になっていたんだ。

「ねえねえ、青田君、また100点取ったんだってー！」

やめてくれ。

「まあ、青田君なら、当然だよ〜。」

ちがうだろ。

「はー、その才能分けてって感じー。」

こんなんでもいいなら、いくらでもやるから。

「だよー！」

「「「あははははっ！」」」

お前らの、お気楽さをわけてくれ。

~~~~~

「陸がさー、また賞とったらしいぜ。」

「あいつさー、調子乗ってね？うざいんだけど。」

~~~~~

・・・この状況は、なんだろう。

「お、おい、陸！先輩たちが、何か、部活のことで用があるから、体育館に来いって・・・」  
と、友達（多分）に言われ、来てみたら、これだ。

先輩ではあるが、同じ部活じゃないし、なにやら、校則違反だらけの方が俺の前に立っておられる。

「前からさー、思ってたんだけどな。お前、ウザイんだよ。」

「て一事で、ちょっと、殴らせてもらいましょうかね！」

なぜ？

と、問うこともできず、俺は、殴られ 無かった。

なぜなら、

まるで、時間が止まったかのように、先輩の拳が止まっていたからだ。

「・・・は？」

なにがどうしてこうなった。

「大丈夫？」 「へ？」

「いや、あの、大丈夫・・・ですか？」 「あ。はい。大丈夫・・・デス。」

・・・ところで、この子・・・「どちら様ですか？」

「あ、すみません！えーと、今日から2年2組に入ります、園山未知です！」

「み、未知さん。ですか、あ、あの。この状況をせつめ・・・」

「えーと、後でいいですか？これ、三分しかもたないので。」 「・・・？」

「とりあえず、何処かに逃げないと！行きますよ！」 「え、ちょ、まっ・・・」

俺は無理やり走らされ、いつの間にか、たまたま開いていた倉庫に入っていた。

「ハアハア・・・、で、えーと、せ、せつめ・・・」

「率直に言います。」 「・・・？」

「あなたの才能と、私の能力を交換してください！！」

「……………は？あ？」

俺、フリーズ。 いや、誰だって、こうなるよ。こんな事言われたら。

「で、ですからー！」

~~~~~

そして俺は、わけわからん能力を貰った。

あの頃の俺は、わかって無さすぎだった。・・・本当に。

能力を持つことが、どんな事かなんて、だれも教えてくれなかったからな。

そのせいで俺は、訳わからん奴らと戦うことになって死にかけ、無駄な知識を身につけさせられ、意味の無い修行をして・・・ははっ、思い出したら、何かムカついてきたわ。ちょっくら、未知を殴ってこうか。

あー、まあ、この能力のおかげで、俺は変わったけどな。

そこんところは、アイツに感謝しないと。・・・やっぱり、殴るのはやめておこう。

仕返しが怖いからなー

迷子の道

…。

なんとなく地元に来てみたけど、どこに行こう？

荷物が面倒だし、泊めてもらう友達の家に行こうかなあ…。

あー、でも、せっかくだから近くの商店街にも行きたいし…。

どうしようかな…。

「…はあ〜。」

こんなことでも迷ってしまう優柔不断な自分が嫌いだ。

私はどうしてこんなことをしているのだろう、と、一日一回思うこの頃である。

「うっ、うっー」

…こんなところで何故、泣いてる子供に出会ってしまうのだ。私が泣きたいよ。

「どうしたの？」

そして、素通りできない。誰か性格を変えてくれ。

「…ううっ…」

この子、誰かに似ているような？

「うーん、困ってるなら、お姉ちゃんに言ってみ？ちょっとは、役に立つかもよ？」

「…え、と、あの、わっ、私、道にまっ、迷ってしまいました、たあ…。」

小さい子でも敬語を使うのね。親のしつけが良いのかしら。

「そっかー。どこにいきたいの？」

「…わ、かんない。」

泣きながら、うさぎのぬいぐるみをギュー、とするのがかわいらしい。

こんなぬいぐるみ、昔持ってたなあ。

「んー、じゃあ、おうちに帰って見たら？」

「う、ん…。」

あー、なんだろう、やっぱり誰かに似ている。

「じゃあ、おうちの場所教えてくれる？」

「えーと、〇〇県□□市田川町道隈241-3です。」

…え？いや、あの、そこ実家があった場所なのだが。

あ、そうか。新しく家が建ったんだな。うん。

「そこならー」

「ありがとうございましたー！」

そうって、女の子は走っていった。

あー、結局、誰に似て… 「あ。」

あれは、あの子のぬいぐるみじゃ…！

「おーい！ぬいぐるみ落としたよー！？」

…って、もう遅いか。

あれ、これって、私が昔持っていたぬいぐるみ？

そして、私は思い出した。

「でも、そ、そんな…。」

そうだ。そんなはずがない。

だが、私の記憶では、私もぬいぐるみを落としていた。

これが、もし、事実だとすれば…

あれは—

君の名

風に揺れる花に問う。

「キミの名前はなんですか？」

けれど花は答えずに、「関係ない」と散っていった。

散った花びらが向かうのは、トオイ とおい 青い空。

地球がこんなに広いなら、宇宙はどれだけ広いのだろう。

ワタシは結局空しくなって、どこかに向かって走ってく。

ワタシは何か足りない、ワタシに嘆く。

現実なんて見たくない。

理想なんて欲しくない。

綺麗事なんて聴きたくない。

未来なんて知りたくない。

過去なんて思い出したくない。

ワタシなんて必要ない。

キミなんて、覚えてない。

覚えてない。知らないはずなのに。分からない。

「なんで？」

理科室の薬品の臭い。

たくさんの実験道具。

ワタシは実験してみたい。

人は死ぬとどうなるか。

もちろん、ワタシは死にたくない。

そんな勇気なんて、ない。

だけど、どうしてだろう。

ワタシはまた、「死にたい」と呟く。

そんな勇気もないくせに。

いつかの思い出。

キミとの放課後 帰り道。

「夕陽が綺麗だね。」と

ワタシが笑う。キミも笑った。

なのに、キミの笑顔が分からない。

キミの影は、ちゃんとあるのに。

そこにあるのに、そこにはない。

ああ、君の影も、もう、消えてしまいそうだ。

手を伸ばしても。

全力で走っても。

必死に叫んでも。

キミはキミはキミはキミはキミはきみは君は君はキミは

そしてワタシは、夢から覚める。

すべての夢から。

キミとの放課後 帰り道。

笑うワタシとキミ。

幸せな毎日。

でも、キミは突然

「死にたい。」と言い出した。

ワタシは笑ってごまかす。

「そんな冗談やめてよ。」

「冗談じゃないよ。」

そうやってキミは、ワタシを見つめた。

ワタシはどうすればいいのか、わからなくなる。

なんで？ どうして？

頭の中は、疑問だらけ。

こんなに幸せなのに。

幸せなのは、ワタシだけ？

キミがこんなに苦しんでたのに、ワタシは、なにも、できなかった。

キミは何事もなかったかのように、笑う。

「嘘。冗談だよ。ごめん。」

そしてワタシは苦しくなって、逃げ出す。

ただ、走る。ハシル。はしる。

ワタシは、弱かった。

翌日、キミは、

ワタシは苦しかった。悔しかった。思い出したくなかった。

ワタシがもっと、強かったら。こんなに、弱くなかったら。

誰も、ワタシを責めてはくれない。

ワタシは、傍観者だった。傍観者でいたかった。

真実を忘れるために。記憶の奥に、しまうために。

だけど、そんなの無理だった。

いつだって、キミの存在を覚えていた。

顔を、名前を、大事なことを、思い出せなくても。

そして、やっと思い出した。

キミの名前は、

キミの顔は、

キミは、もう一

夏の出来事はループする

「あーもう、焼けるー！」

「あはは！ミカってすぐ焼けるよねー。」

「そうなのよ。また日焼け止め塗らきゃー。」

「夏って、暑いし大変だよねー。」

「・・・」

私、かんっぜんに『浮いてる』。

え、あ、いや。クラスで浮いてる存在とかじゃなくて。

『物理的』に浮いてる。

詳しく言うと、私は今、床よりも天井の方が近いところにいる。

地に足がついていない状態だ。『物理的』に。

そして、下には『私』がもう一人いる。

・・・ドッペルゲンガー。いや、夏の暑さにやられたのか？

ああ、そうだ。きっと、これは夢。いつか覚めるはずだ。うん、大丈夫。

・・・と、思ってみても。この状況は、かなり怖い。

だって、この夢がもし現実だったら？夢から覚めなかったら？

そう思ってるうちに、もう一人の『私』はなにやら友達と話始めた。

ん？私にあんな友達いたっけ？よく見れば、クラスの人が、違う・・・？

・・・「いったっ！」

試しに、よく漫画に出てくるやつっぽく自分の頬をつねってみた。

まあ、うん。痛い。てーことは、現実・・・なの？

「どうしよう・・・。」

思わず口に出た言葉は、誰にも聞こえていなかった。

でも、もう一人の『私』は気づいたようだ。

「・・・」

無言で、私のいる方向を見つめている。

「？ちょっとー、香奈子？大丈夫？」

「あー、うん。大丈夫。ちょっとぼー、としちゃって。」

「香菜子も夏の暑さに負けたかー。」

「あははー。かもねー。」

あの『私』は、私の事がわかる。
とすれば、接触してみるしかない。

「えーと、もうひとりの『私』！ちょっとついてきてー！」
さすがに、ここで話すのはまずいだろ。
と思い、人目につかないところへ行く。

「・・・」
ちゃんと、『私』はついてきていた。ていうか、なんで驚かないんだろう？

「・・・ねえ、私はどうしたら、元に戻れるの？」

「あなたが、自覚したら。」

「え？」

「あなたが、自分が浮いていると自覚したら、戻れる。」

「・・・うん。確かに、浮いてる。」

「いや、物理的にじゃなくて。クラスで浮いてるって。」

そんなはずない。だって、浮いてないし。

「でも、あなたには友達がない。」

もう一人の『私』は、まるで私の心を見透かしたように言った。

「い、いるわよ！友達くらい。あなたがさっき話していた人って、私の友達でしょ？」

そうだ。きっと、あの時の人は私の友達だ。だって、私と『私』は同じだ。

「違う。私とあなたは、同じじゃない。」

「・・・は？そんなはずなー！」

「だって、私とあなたは、生きている『時』が違うもの。」

「？」 「・・・つまりね。」

「あなたは『過去』の私。私は『未来』のあなた。」

ていうことは、私はタイムスリップした？ってこと？

「正解。ここは、あなたの『時』で一年後の世界。で、自分が浮いてるって自覚できた？」

「いいえ。私は、浮いてない。」 「そうよね。私もこれくらいじゃ自覚できなかった。」

そして、『私』は何かを思い出すように、目を閉じた。

「・・・私は、怖かった。自覚するのが。だって、自覚してしまったら、元に戻ってしまうから。」

「私は、学校が怖かった。教室が怖かった。心が苦しくなるから。

自分が遠ざけられているのがわかるから。・・・相談できる友達もいなくて、いつも一人だった。」

「・・・違う。」

「そう、違う。違ったの。私は、遠ざけられてるんじゃない。」

「「私が、遠ざけていたの！」」

そして、やっと私は自覚した。自分が浮いてる、と。

いや、自分が望んで、浮いていたのだと。

「は一、やっと自覚したわね。じゃ、とっとと戻りなさい。」

「え、で、でも。どうす……？」

言い終える前に、私の体が段々消えていくのに気がついた。

「戻っても、この記憶はちゃんと残る。あなたは、変われる。」

「……」

「この出来事は、繰り返される。何度でも。」

「だからあなたは一年後、教えてあげるの。もう一人の『私』に。」

「わかった？」 「……うん。」

「じゃあ、————。」

そして私の体は消え、私は自分の『時』に戻った。

消える瞬間、『私』が何か言った気がするが聞き取れなかった。

ただ、私ならあそこで、「頑張って。」と言う気がするので、

そう言った事にしておこう。

エピローグ？

――はあ～…」

思わず、大きなため息をついてしまった。

今日借りたはずの短編集をもう、読み終えてしまったからだ。

内容は、恋や友達、勉強等に悩む中学生の話で、ひとつの話が数ページで書かれていた。

そして、どの話でも最後は『ハッピーエンド』になっていた。

「ハッピーエンドねえ…」

現実では、誰もがハッピーエンドなんてありえない。誰かが喜ばば、誰かが悲しむ。これが、現実だろう。

しかし、この本ではそんな現実なんてお構いなし。最後は皆、笑顔なのだ。

まるで、中学生に希望を贈るように。

「そういうことか」

この本 「中学生に贈る短編集」 は、中学生に希望を贈る短編集だったのだ。

…私は、希望を貰ったのだろうか？

考えてみても、よくわからない。だが、あの「ワクワク」は、希望に似ている気がした。

そして、この本を読んでいる間も、あの「ワクワク」は止まらなかった。

もしかすると、私は希望を貰ったのかもしれない。

「ははっ」

やっぱり、気が付けば笑っていた。

この調子なら、長編を読める日も近いかもしれない。けど、もう少し後にしよう。

また、短編集を読みたいから。これぐらい短いほうが、私には合ってると思うし。

「希望…」

口にしてみると、くだらない日常の全てが、希望に満ち溢れているように思えた。

いつもの自分なら、こんなことバカみたいだと言うだろう。だって、ここは現実。物語じゃないのだから。

でも、今の私は笑っていた。

まるで、『希望』という魔法にかけられたかのように。

「そうだ。」

私は机の引き出しから、あるノートを取り出した。それは、「目標ノート」だった。母に、「テストの点が悪いのは、目標が無いからじゃないの？あんたは、いつも目標を持たないから。」と先日のテストの点についてこっぴどく叱られたため、作ったノートである。まだ、白紙だけど・・・。

私は、そこらへんにあったペンで、一ページ目に大きな文字でこう書いた。

『人生の目標： ハッピーエンド 』 と。



あとがき？

はじめまして。

草花 小路（くさか こみち）という者です。

「暇潰しの`超`短編集」を読んでいただき、ありがとうございます。

プロローグ（以下P）とエピローグ（以下E）的な何かを作ってしまった、ややこしくなっていました...

PとEはつながっていますが、それ以外の短編は関係ないです。

決して、PとEに出てくる短編集の内容では、ありません。

勘違いをしてしまった方、申し訳ございませんでした。

話変わって、短編集の内容についてです。

ほとんどが、学生中心のお話になっています。まあ、作者が中学生なので、まだまだ経験が足りないということで、ご勘弁を...

魔法とか異能とか、好きです。そのため、話の中でも時々そういうのが出てきます。

そういうのが使えたら楽しそうだけど、やっぱり困ることもあるんだと思います。人とは違いますからね。

なので私は、夢の中だけで十分です。

...なんか、話に変な方向になってました。すみません。

この短編集を読んでいて、「もう終わり？」と思う方もいらっしゃると思います。

なぜなら、ほとんどのお話が、私の脳内では長編だからです。

そのため、長いお話を短くまとめたようなものになっています。また、本当の終わりが書かれていないのもあります。その場合は、勝手に想像してやってください。それもひとつの楽しみ方です。

少し話が戻りますが、脳内では長編なのに、何故短編集になってるのかというと、まあ単純に、長くなると終わりまで書けないからです。そこまで書く気力がないです。

挑戦はいつかしようと思います。その「いつか」はわかりませんし、書かないかもしれませんが。

なんだか、微妙な終わり方になってしまいましたが、あとがきが長すぎるのはどうかと思うので、こちらへんで。

また私が何かを書いたときに、あなたが読んでくださることを願って。

平成23年 7月10日

草花 小路

暇潰しの`超`短編集。

<http://p.booklog.jp/book/29910>

著者：草花 小路

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/inoueky/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/29910>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/29910>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.